

ニホンアミカモドキ 双翅目 (ハエ目) アミカモドキ科

Deuterophlebia nipponica Kitakami, 1938

鳥取県：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



蛹 鳥取市河原町佐貫 1995/撮影：阪田睦子

■**選定理由**：県内では2カ所の確認があるのみで、生息確認地が限定されている。生息地は水のきれいな急流中の礫に限られている。

■**特徴**：幼虫の体長は最大で4 mm強、蛹は体長2 mm程度と非常に小さい。幼虫は独特な形で、各腹節は側方に伸びている。蛹は扁平な楕円形で、呼吸角は縮れている。急流の岩に付着して生息している。

■**分布** 県内：鳥取市河原町佐貫の千代川、三朝町湯谷の天神川。県外：本州、九州。日本固有種。

■**保護上の留意点**：河川の礫底の急流を保全するため、河川勾配や蛇行に配慮する。河川工事等による長期の濁水は影響を及ぼすと考えられる。

■**文献**：80, 100.

執筆者：阪田睦子

キオビホオナガスズメバチ本州亜種 膜翅目 (ハチ目) スズメバチ科

Dolichovespula media sugare Ishikawa, 1969

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



林端部の樹木の小枝にかけた巣房 氷ノ山 2009.8.1/撮影：佐藤隆士

■**選定理由**：本州中部以北では普通種であるが、中国地方では山地の森林帯だけに生息する稀種。中国地方は本州での分布の南限にあたる。

■**特徴**：体長はクイーン19–22 mm、ワーカー13–16 mm、オス19 mm前後。巣は林端部で、枝葉に囲まれた樹木の枝に釣り下げられる。真社会性で、越冬クイーンによる単独営巣は5月中旬に始まり、誕生した娘バチはワーカーとしてコロニーの発達に参画する。成熟巣でも、育房数は250–1700個に過ぎない。生殖虫（新クイーンとオス）は8–9月に出現し、交尾する。新クイーンは受精後に朽木内に穴を掘って越冬する。なお、クイーンの体色と模様はワーカーのそれらと著しく異なる。ワーカーの腹部の斑紋は多様で、ある地方では五目蜂と呼ばれる。

■**分布** 県内：大山、沖ノ山、氷ノ山。県外：本州。

■**保護上の留意点**：標高500 m以上の自然林の保全。

■**文献**：102, 103, 112, 113, 161.

執筆者：前田泰生

フクイアナバチ 膜翅目 (ハチ目) アナバチ科

Sphex inusitatus Yasumatsu, 1935

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



雌 岡山県西栗倉村 2009.8.6/撮影：永幡嘉之

■**選定理由**：既記録地が局地的。

■**特徴**：体長20–35 mmの大型のハチ。近縁のクロアナバチの顔面が銀白色毛で覆われるのに対しフクイアナバチは黒から黒褐色であることにより区別できる。土中に巣を作り、ハネナシコロギスを餌として狩る。県内でこれまで確認された生息地はすべて人為的に作られた水はけのよい裸地であり、新しい真砂土をとくに好む。

■**分布** 県内：八頭町落岩、智頭町大呂、若桜町若桜、鳥取市佐治町加茂・尾際・安蔵、三朝町木地山・穴鴨、江府町武庫、三朝町小鹿溪。県外：本州（北陸・近畿・中国地方）、九州（大分・福岡・佐賀・長崎）。

■**保護上の留意点**：1) ハネナシコロギスの生息地である樹林の保全。2) 人為的な裸地への依存度が高いため、コンクリートや草木で覆われていない地面の確保。墓地、社寺境内、公園等は営巣適地になりうるが、同一地点で長期間営巣することが少ないため、広がり連続性に留意すべき。

■**文献**：16, 73, 195.

執筆者：加藤 学・永幡嘉之

ニッポンハナダカバチ 膜翅目 (ハチ目) アナバチ科

Bembix nipponica F. Smith, 1873

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



砂上を歩行するニッポンハナダカバチ
米子市篠津町和田御崎神社境内 2008.7.6 / 撮影：干村隆司

■**選定理由**：海浜とその周辺の開発，車両の乗り入れ，漂流物の堆積などによる海浜生態系の破壊が営巣地の喪失と獲物昆虫の減少をもたらし，生息を危うくしている。日本固有種。

■**特徴**：雌雄間で体長差はなく，18 mm前後の大型のカリバチ。海浜の砂地に好んで集団営巣する。育房は緩やかに傾斜して穿坑された主坑（深さ15–20 cm）から分岐した側坑で水平方向に連結される。幼虫餌としてハナアブ科をはじめとする種々のハエ類を狩る。年1化性で，活動期は6月末から8月中旬までの約1.5カ月間。内陸でも類似の環境があれば営巣が見られる（寺社の墓地や境内）。

■**分布** 県内：鳥取市（3カ所），米子市（12カ所），大山町（1カ所），琴浦町（3カ所）。県外：北海道，本州，四国，九州，屋久島。

■**保護上の留意点**：海浜とその周辺の生態系の保全。

■**文献**：6, 56, 157, 199, 200.

執筆：前田泰生

キアシハナダカバチモドキ 膜翅目 (ハチ目) アナバチ科

Stizus pulcherrimus (F. Smith, 1856)

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



成日吉津村日吉津海岸 2008.7.20 / 撮影：干村隆司

■**選定理由**：全国的にきわめて局地的にしか分布せず，生息地も少なく減少している。県内では現在のところ日吉津海岸1カ所で生息が確認されているが，ランクを判定できるだけの情報が得られていない。

■**特徴**：体長25 mm前後で，黒色の体に黄色の斑紋と赤褐色の脚をもつアナバチ類。海岸や河岸などの日当たりのよい砂の裸地を好んで営巣する。幼虫の餌としてハツタ類を狩る。活動期は夏季で，鳥取県では7月下旬に営巣と成虫が確認されている。

■**分布** 県内：日吉津村日吉津海岸。県外：本州，四国，九州；朝鮮半島，中国大陸。

■**保護上の留意点**：詳しい生息実態調査，および海浜の保全が必要。

■**文献**：—

執筆：川上 靖・干村隆司

コウベキヌゲハキリバチ 膜翅目 (ハチ目) ハキリバチ科

Megachile (Eutricharea) kobensis Cockerell, 1918

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



日吉津海岸 2008.7.20 / 撮影：干村隆司

■**選定理由**：海浜とその周辺の開発，護岸工事，車両の乗り入れ，漂流物の堆積などによる海浜生態系の破壊が営巣地の喪失と花資源植物の減少をもたらし，本種の生息を危うくしている。日本固有種。

■**特徴**：体長はメスが9–11mm，オスが8–10mmの小型のハキリバチ。典型的な広食性であるが，営巣地である海浜砂丘とその近辺に生育するハマゴウ，コマツナギ，ハギ類などを花資源として利用する。ハマゴウの主要な送粉者である。部分的2化性で，活動期は6月中旬から9月中旬までの約3カ月間。砂地に分岐のない緩やかな傾斜した単坑を掘り（深さ約2–6 cm），その先端に1–3個の育房を配置する。育房は葉片で作製される。

■**分布** 県内：境港市弓ヶ浜，東伯郡北条砂丘，鳥取砂丘。県外：本州，四国，九州。

■**保護上の留意点**：海浜とその周辺の生態系の保全。

■**文献**：11, 45, 101, 104, 114.

執筆：前田泰生

キバラハキリバチ 膜翅目 (ハチ目) ハキリバチ科

Megachile xanthothrix Yasumatsu & Hirashima, 1964

鳥取県：情報不足 (DD)

環境省：—



雄 鳥取市浜坂新田 2003.7.22-23 (株)ウエスコ採集/撮影：深川博美

■**選定理由**：西南日本の砂地環境に生息する典型的な海浜性ハナバチ。生息環境の劣化による個体数の減少が報告されているが、県内の生息状況については情報が乏しい。

■**特徴**：体長16-18 mmの大型のハキリバチ。胸腹部の背面が黄褐色の毛で密に覆われ、他のハキリバチとの識別は容易。年1化性で成虫は夏から初秋に活動する。ハギ類、クズ、ヨメナ、カラスザンショウ、ハマゴウなどに訪花する。他県では海浜部や砂地で営巣が確認され、硬い砂地の地面に自ら穿孔するほか、アナバチ類などの放棄巣を借孔するとされる。

■**分布** 県内：鳥取市、米子市。県外：本州（愛知、三重、大阪、京都、岡山、島根、広島、山口）、四国（香川、高知）、九州（福岡、佐賀、鹿児島）；朝鮮半島、中国東北部。

■**保護上の留意点**：県下での情報がきわめて不足。生息状況の把握が必要。

■**文献**：4, 207, 214.

執筆者：佐藤隆士

キバネセセリ 鱗翅目 (チョウ目) セセリチョウ科

Bibasis aquilina chrysaeglia (Butler, 1882)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—



北海道紋別郡丸瀬布町 2010.7.13/撮影：坂田国嗣

■**選定理由**：生息地が局地的で個体群サイズがきわめて小さい。

■**特徴**：大型のセセリチョウ、似た種はなく識別は容易。落葉広葉樹林に生息する。幼虫の食樹ハリギリは二次林的な環境に生育し、県東部の海岸部にも高密度で生育する地域がある。夏に発生、敏捷に飛び、吸水、または獣糞に集まることが多い。県内では稀に採集されるのみで、詳しい生態は不明だが、近年でも低密度で定着発生していると考えられる。

■**分布** 県内：記録があるのは大山山系、智頭町沖ノ山（いずれも古い記録のみ）、岩美町の海岸部。県外：北海道、本州、四国、九州（日本固有亜種）；ロシア沿海州、朝鮮半島、中国に別亜種。

■**保護上の留意点**：二次林を含む落葉広葉樹林を大面積で保全すること。

■**文献**：74.

執筆者：永幡嘉之

ギンイチモンジセセリ 鱗翅目 (チョウ目) セセリチョウ科

Leptalina unicolor (Bremer & Grey, 1852)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



伯耆町福永原 2010.7.30/撮影：坂田国嗣

■**選定理由**：県東部では近年記録がなく、中・西部でも生息地が限定され個体数も少ない。主要な生息地である山地や河川の堤防・河川敷のススキ原は開発や河川改修等で環境変化が起りやすく注意が必要。

■**特徴**：翅長13-18 mm。中型のセセリチョウで腹部が長い。翅の表面は、黒褐色。後翅裏面中央部に春型は銀白色、夏型は黄褐色の帯がある。年2回（5月、7-8月）発生し、明るいススキの草原を低く弱々しく飛ぶ。幼虫の食草はイネ科のススキやエノコログサなど。

■**分布** 県内：県中部の倉吉市と西部各地の河川敷や休耕田のあぜ道等。近年、東部での記録はない。県外：北海道、本州、四国、九州に分布するが局所的。

■**保護上の留意点**：局所的な生息地が河川の改修工事や除草等で減少する恐れがあるので生息状況を把握するための実態調査が必要である。

■**文献**：111, 134, 183.

執筆者：松田裕一

ホシチャバネセセリ 鱗翅目 (チョウ目) セセリチョウ科
Aeromachus inachus (Ménétriès, 1858)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧I類 (CR+EN)



■**選定理由**：移進行による山地草原の減少にともない個体群の孤立と減少が急激に進行している。

■**特徴**：ごく小型のセセリチョウ。山地の乾性草原および辺縁部に生息し、食草はオオアブラススキ (イネ科) など。盛夏に発生、花に集まるが、飛び方は敏捷で発見しにくい。幼虫越冬。中国山地沿いの草原に分布するが、近年激減している。

■**分布** 県内：過去に若桜町、鳥取市用瀬町、智頭町、江府町、日野町から記録があるが、現在は調査不足もあり、確実な生息地の有無は不明。県外：本州、対馬；ロシア極東地域、中国、朝鮮半島。

■**保護上の留意点**：生息地ではいずれも管理放棄によってササの侵入が進んでおり、人為的な維持管理が不可欠。火入れは越冬幼虫に大きな影響を与えるため、草刈りが望ましく、回数は地形・植生に応じて調節すべき。

■**文献**：120.

岡山県黒岩高原 2003.7.31 小林一彦採集/撮影：永幡嘉之

執筆：永幡嘉之

スジグロチャバネセセリ 鱗翅目 (チョウ目) セセリチョウ科
Thymelicus leoninus leoninus (Butler, 1878)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



■**選定理由**：生息地の局所性が著しく、減少が進んでいる。

■**特徴**：年1回、夏季に発生。食草はカモジグサなどのイネ科植物。樹林をまじえる草原に生息し、花に訪れる。

■**分布** 県内：県中～西部の山地。倉吉市関金町～日野町での記録があるが、近年の確認は大山山系や日野町の一部に限られる。県東部での記録を欠くが、氷ノ山の兵庫県側には生息しており、分布空白域か調査不足かは要検討。県外：北海道南部、本州、九州；中国、アムール、朝鮮 (別亜種)。

■**保護上の留意点**：小型で確認が難しいため生息状況の現状確認が急務。樹林周辺の草地で確認されるが、県内での発生地の微環境を明らかにした上で、周辺植生を含めて保全する方法を検討すべき。

■**文献**：109.

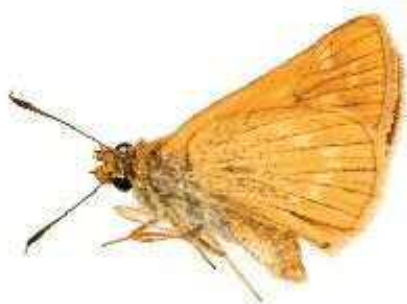
山形県 2010.7.21/撮影：永幡嘉之

執筆：永幡嘉之

コキマダラセセリ 鱗翅目 (チョウ目) セセリチョウ科
Ochlodes venatus venatus (Bremer & Grey, 1853)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—



■**選定理由**：生息環境の急激な減少により、個体群の孤立が進んでいる。

■**特徴**：セセリチョウの中では大型。年1化で成虫は盛夏に出現。幼虫の食草はススキなどイネ科の各種とカヤツリグサ科の一部。成虫は花によく集まる。山地のススキ主体の乾性草原に生息。かつては採草地に広く生息していたが、農業生産様式の変化による造林や植生変化により生息地の大部分は失われるか、遷移が進行し消失した。周辺の林道沿いに一時的に進出する例もみられ、他の草索性蝶類よりも環境適応性が認められる。

■**分布** 県内：岩美町～日南町の中国山地沿い。現在残る生息地は多くないと予想されるが、正確な現状の把握はなされておらず、調査が急務。県外：北海道、本州；ヨーロッパ大陸北部～東アジア北部。

■**保護上の留意点**：生息地の草原を人為的に維持管理する必要がある。孤立個体群であり、火入れは越冬幼虫に影響を与えるため草刈りが望ましい。

■**文献**：75.

三朝町田代 2003.7.17 小林一彦採集/撮影：永幡嘉之

執筆：永幡嘉之

ギフチョウ 鱗翅目 (チョウ目) アゲハチョウ科

Luehdorfia japonica Leech, 1889

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



大山上の原スキー場 2009.4.11 / 撮影：干村隆司

■**選定理由**：起伏に富み適度に開けた良好な里山環境の指標であり、開発や雑木林の衰退で生息地・個体数とも減少傾向にある。

■**特徴**：前翅長30 mm内外。翅は黒色の地色に黄色の縦線を複数伴う。年1化 (3月下旬～5月上旬)。早朝から日中にかけて樹影のある山頂部や尾根筋、伐採斜面などに集まる。食草はカンアオイ類 (春は明るく、夏は薄暗くなるような季節的推移のはっきりした林床に多い)。ミヤコアオイを食草とする東部とサンインアオイを食草とする西部の2群および日南町にヒメカンアオイを食草としミトコンドリアND5 遺伝子にも固有の特徴をもつ集団がある。

■**分布** 県内：各地 (80カ所あまり)。県外：本州 (日本海側は秋田県以南、太平洋側は東京都以西)。日本固有種。

■**保護上の留意点**：カンアオイ類の生育する雑木林を保全すること。日南町の個体群は特異なものでありとくに厳重な保全が必要。

■**文献**：27, 66, 208.

執筆者：淀江賢一郎

ジャコウアゲハ 鱗翅目 (チョウ目) アゲハチョウ科

Atrophaneura alcinous (Klug, 1836)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



南部町法勝寺 2010.8.20 / 撮影：坂田国嗣

■**選定理由**：近年、生息地・個体数とも極端に減少傾向にある。

■**特徴**：前翅長45–60 mm前後。長い尾状突起をゆらし、食草ウマノスズクサの生える草地 (畑の脇、墓地、河川敷などのやや荒れた開放的な草地) を低くゆるやかに飛ぶ。年に2–3回の発生を繰り返す (5月上旬、7–9月ごろ)。雌はウマノスズクサの葉裏や茎に1–数卵を産付。食草を食い尽してしまうことがしばしばあり、発生地が移動することが知られている。

■**分布** 県内：各地に分布するが、生息密度はごく低い。県外：北海道を除く日本全土、琉球列島。

■**保護上の留意点**：日野川では堤防の土手の斜面がコンクリートで固められたためほぼ絶滅した。また大山山麓にはオオバウマノスズクサに依存する個体群もいたが農地開発によって近年見られなくなった。食草ウマノスズクサ、オオバウマノスズクサの生える草地の保全が重要である。

■**文献**：117, 135.

執筆者：淀江賢一郎

ツマグロキチョウ 鱗翅目 (チョウ目) シロチョウ科

Eurema laeta betheseba (Janson, 1878)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



湯梨浜町宇野 2010.9.26 / 撮影：田村昭夫

■**選定理由**：農地周辺、砂丘、河川敷、墓地、堤防などのような不安定な場所に生息し、生息環境の改変の影響を受けやすい。

■**特徴**：翅長20 mm内外。普通種のキタキチョウよりも小型で前翅先端が尖る (とくに秋型で顕著)。河川敷、海岸砂丘などの荒れ地や農地周辺に生息し、幼虫はカワラケツメイ (マメ科) のみを食べる。成虫で越冬し、年2化。成虫はマメ科、キク科、スミレ科などを訪花する。県内でも減少傾向にある。

■**分布** 県内：県内 (農地周辺、河川敷、砂丘、放牧地など明るい荒れ地) 全域。県外：本州 (福島県以南)、四国、九州。

■**保護上の留意点**：減少の原因は、開発改修等の環境変化、強く攪乱を受ける草原環境 (河原や路傍、池の堤防など) の変化により、食草や吸蜜植物が失われることにある。生息地の管理と、生息地の連続性をもたせること。

■**文献**：49, 105, 171.

執筆者：田村昭夫

スジボンヤマキチョウ 鱗翅目 (チョウ目) シロチョウ科

Gonepteryx aspasia nipponica (Bollow, 1930)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：—



兵庫県新温泉町後山 1993.9.20/撮影：永幡嘉之

- 選定理由**：近年激減し、地域的な絶滅が進行している。
- 特徴**：シロチョウ科の中では大型。年1化で、県内では初夏に羽化するが夏眠し、秋季に再び花に集まる。成虫越冬で春に産卵。食草はコバノクロウメモドキ。低山地から山地の明るい二次林およびその辺縁部。県内には少ないながら山地に広く分布していたが、近年の確認例は乏しく、現状の確認が急務で、動向に留意する必要がある。春季には発生地を離れて分散するため、9月の調査が有効。
- 分布** 県内：全域の丘陵地～山地。県外：本州、四国、九州（絶滅）；ロシア極東、朝鮮半島、中国。
- 保護上の留意点**：コバノクロウメモドキは二次林の辺縁部に局所的に自生するため、食草の自生地を細切れに残すのではなく、二次林を大面積で連続性をもたせて維持してゆくことが重要である。
- 文献**：121.

執筆：永幡嘉之・佐藤隆士

ウラミアアカシジミ 鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Japonica saepestriata (Hewitson, 1865)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：—



岡山県新見市久保井野 2008.6.15/撮影：坂田国嗣

- 選定理由**：生食樹のコナラやクヌギの若木の減少のため、近年、個体数が激減している。
- 特徴**：年1化、卵越冬。成虫は6月上旬から7月下旬にかけてみられる。アカシジミより10日程度発生が遅い。平地のクヌギやコナラの雑木林に生息し、昼間はクリの花などで吸蜜。食草はクヌギなどの若木。産地は限られるが、県内には広く分布していた。しかし雑木林が更新されず、食葉を提供する若い木が全域で減少しているせいなのか、個体数は減少が著しい。
- 分布** 県内：県内全域であるが、生息地（平地や丘陵地の、アベマキ、クヌギ等の落葉ナラ類の林）は限られる。県外：北海道南部、本州、四国北部に分布し、ロシア沿海州、中国東北部、朝鮮半島。
- 保護上の留意点**：生息地では食樹が更新するよう雑木林（里山）の適度な管理が必要。また、生息実態調査も必要。里山の開発も危惧される。
- 文献**：105, 111, 171.

執筆：田村昭夫

オナガシジミ 鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Araragi enthea enthea (Janson, 1877)

鳥取県：その他の重要種 (OT)

環境省：—



鳥根県隠岐郡隠岐の島町大久 2006.8.4/撮影：坂田国嗣

- 選定理由**：千代川上流付近で翅の紋様パターンが移行する。近年、渓谷部の道路建設等により減少傾向も著しい。
- 特徴**：前翅長約18 mm。年1回7月中旬ごろから発生。夕方に食樹オニグルミの梢を飛び交う。卵は大木わきにある小木やひこばえの休眠芽付近に1～数個ずつ産みつけられる。山地渓谷のオニグルミ林に生息するが、鳥取市内を流れる千代川を境に、その東側の個体群は翅の色調が黒っぽく、西側の個体群では白っぽいことが知られている。写真は隠岐産で斑紋はやや異なる。
- 分布** 県内：八頭町（旧郡家町）姫路、鳥取市佐治町河本、江府町三平山、日南町多里など、標高300–500 m前後の渓谷。県外：北海道、本州、四国、九州；中国東北部、朝鮮半島、台湾、ロシア沿海州。
- 保護上の留意点**：渓谷ぞい道路建設により伐採されやすい。オニグルミを含む自然林の保全が必要である。翅の紋様の移行域はとくに保全が重要。
- 文献**：5, 215.

執筆：淀江賢一郎

ミドリシジミ 鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Neozephyrus japonicus (Murray, 1875)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



三朝町若杉山 2000.7.28 小林一彦採集/撮影：永幡嘉之

- 選定理由**：湿地の埋め立てにより、規模の大きな生息地が減少傾向。
- 特徴**：成虫は6月中旬～7月に発生。雄は夕刻活発に飛び回る。卵で越冬。県内での分布は広く、生息地は食草ハンノキの生育する湿地や平野部のため池周辺と、ヤマハンノキの生育する山地の林道沿いや乾性草原の辺縁部に大別されるが、低地にある前者の減少が顕著である。規模の大きな生息地は、低地では西部に多いが、大山町種原や日南町花口などの湿原は埋め立てにより消失した。
- 分布** 県内：全域の低山地～山地。県外：北海道～九州；ロシア極東部・中国東北部～朝鮮半島。
- 保護上の留意点**：県西部に点在するハンノキの生えた湿原は、複数のレッドデータブック掲載種の生息地でもある。周辺開発による水位低下を防止しつつ、現状のまま分断しない形で維持を図る必要がある。
- 文献**：122.

執筆者：永幡嘉之

ヒサマツミドリシジミ 鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Chrysozephyrus hisamatsusanus hisamatsusanus (Nagami & Ishiga, 1935)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



鳥取市 2009/撮影：鳥越康教

- 選定理由**：生息地が非常に限定され、かつ個体数も減少傾向。
- 特徴**：前翅長は18 mm前後。鳥取市久松山がタイプ産地で、和名「ヒサマツ」ミドリシジミは、久松山を意図的に読み替えたもの。雄の翅表は前後翅とも黒緑にふちどられて緑色に輝き、雌は茶褐色の地色で前翅中室に赤斑と青斑をもつ。食樹はウラジロガシ。霧が立ちこめるような照葉樹林の谷筋が発生地。年1化（6月中旬～7月上旬に発生、9月下旬～11月上旬に産卵）。
- 分布** 県内：久松山（鳥取市）、佐治谷（旧佐治村）、三徳山（三朝町）、大山（旧溝口町）など。久松山では絶滅したとされていたが、きわめて少数が残存しているようである。県外：本州、四国、九州。日本固有種。台湾に近似種イチモンジミドリシジミが生息している。
- 保護上の留意点**：自然度の高い照葉樹林帯やウラジロガシの混じる落葉広葉樹林帯をこれ以上伐採しないことが必要である。
- 文献**：189, 193.

執筆者：淀江賢一郎

キリシマミドリシジミ 鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Chrysozephyrus ataxus kirishimaensis (Okajima, 1922)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



鳥根県隠岐大久 2000.8.11/撮影：坂田国嗣

- 選定理由**：県内の生息地は局地的で、生息地・個体数ともに減少。日本海側分布の東限。
- 特徴**：前翅長は20 mm前後。雄の翅表は金緑色で外縁は細い黒線、裏面は銀白色で弱い褐色斑。雌の翅表は暗褐色で前翅基半部に青藍斑、裏面は褐色で太い白線。雌雄とも裏面後翅端に橙色斑。年1化で成虫は7-8月に発生し、雄は日中に斜面を敏速に飛翔するが雌は樹間に潜む。主要な食樹はアカガシで休眠芽の基部に産卵。翌春に孵化して幼葉を綴り巣をつくる。
- 分布** 県内：鳥取市、倉吉市、三朝町、琴浦町、江府町などで産地が知られるが記録の途絶えたところが多い。県外：本州（神奈川県丹沢以西）、四国、九州、対馬、隠岐。
- 保護上の留意点**：本種が生息するアカガシが混生する常緑広葉樹林は限られており、全面的な保護が必要。
- 文献**：48. 111. 190.

執筆者：門脇久志

オオミドリシジミ 鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Favonius orientalis (Murray, 1875)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



岡山県恩原高原 1993.7.29 / 撮影：鳥越康教

- 選定理由**：生息地，個体数ともに1980年代後半より減少傾向。
- 特徴**：翅長20 mm内外。年1化で成虫は6月上旬から7月上旬にかけてみられる。昼間にクリの花などで吸蜜する。平地のコナラ，ナラガシワ林に生息し，県内全域に生息するが，生息地は限られている。
- 分布** 県内：ほぼ全域に生息するが，生息地（低山地のコナラ，カシワ，ミズナラ，ナラガシワ，クヌギ等の落葉ナラ類の林）は限られる。県外：北海道，本州，四国，九州；サハリン，ロシア極東地域，中国東北部，朝鮮半島，モンゴル。
- 保護上の留意点**：コナラなどの雑木林（里山）の適度な管理。また低標高の山地にある本種の生息地はしばしばアカマツ林などと隣接するため松くい虫防除のための農薬の空中散布による影響も懸念される。里山の開発も危惧される。
- 文献**：105, 111, 171.

執筆：田村昭夫

クロミドリシジミ 鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Favonius yuasai (Shirôzu, 1947)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



岡山県新見市久保井野 2007.6.17 / 撮影：坂田国嗣

- 選定理由**：食樹のクヌギの古木が伐採され生息地が狭まりつつある。
- 特徴**：前翅長20 mm前後。雄の翅表が緑色をしていない唯一のミドリシジミ類。食樹クヌギの古木が含まれる雑木林に生息。クヌギは全国的にもっとも広く分布する落葉広葉樹であるが，本種の分布は限定され，遺存種と思われる。終令幼虫の静止場所は樹間の表皮の裂け目であるが，多産地の信州地方では地表近いところ，中国地方では高所で見出され，生態が異なるのが興味深い。県内には，岡山県や兵庫県の山陽地方に見られる薪炭のための大規模な雑木林がないので，個体数も少なく発見も遅れた。
- 分布** 県内：三平山（江府町）。県外：本州，九州；国外では朝鮮半島。
- 保護上の留意点**：県内では2003年に三平山で初めて発見された。もともと三平山は草山だったが，スギ・ヒノキ植林がすすみ，生息環境は著しく悪化した。クヌギの古木を伐採しないなど森林の適切な管理が必要である。
- 文献**：137, 169.

執筆：淀江賢一郎

ヒロオビミドリシジミ 鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科

Favonius cognatus latifasciatus Shirôzu & Hayashi, 1959

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



日野郡日野町鵜の池 2008.6.13 / 撮影：坂田国嗣

- 選定理由**：県内の生息地は限定され，かつ減少が著しい。
- 特徴**：前翅長約21 mm。本州西部地域のみが生息する種で，ナラガシワの古木が見られる二次林のみが生息地になり，若い木だけでは発生が見られない。年1化で6月中旬頃が最盛期になり，雄は午前と午後2時間程度活発に飛翔するが，雌は不活発で葉上にいることが多い。
- 分布** 県内：鳥取市（福部町，国府町，河原町），三朝町，日野町など。県外：本州西部（大阪府西部～山口県）。
- 保護上の留意点**：ナラガシワは二次林として存在するが，開発などの影響で伐採され消滅する傾向にあり，多産した鵜の池も減少が激しい。残ったナラガシワ林の保全をしていくことが重要。
- 文献**：171, 191.

執筆：坂田国嗣

ウラジロミドリシジミ 鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科
Favonius saphirinus (Staudinger, 1887)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



岡山県新見市久保井野 2010.6.24 / 撮影：坂田国嗣

■**選定理由**：身近にみられる普通種であったが、低山地にあるナラガシワ林に生息するため、人為的な影響を受け近年急速に生息地が減少した。

■**特徴**：雄の翅表は青緑色の金属光沢を呈し、雌の翅表は黒褐色である。翅の裏面が白色の地にうすい斑紋が入っていることが種名になっている。食草のナラガシワの枝に産みつけられた卵は新芽の萌芽とともに孵化し、幼虫、蛹を経て成虫は6月中旬に羽化する。

■**分布** 県内：県内全域の平地や丘陵地。県外：北海道，本州，九州。

■**保護上の留意点**：食草として必要なナラガシワ林を更新伐採して維持することと、林縁がおもな生息域であるため、果樹園やマツ枯れ防除の薬剤散布で影響を与えない配慮が必要である。

■**文献**：87.

執筆者：國本洸紀

ミヤマカラスシジミ 鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科
Strymonidia mera (Janson, 1877)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：—



長野県松本市 1984.7.24 / 撮影：坂田国嗣

■**選定理由**：個体数の減少が著しく、個体群が縮小していると考えられる。

■**特徴**：小型で褐色のシジミチョウ。年1回，7月に羽化し，樹林で葉上に静止していることが多い。山地の落葉広葉樹林の疎林もしくは渓谷林に生息。食草コバノクロウメモドキは林縁や岩角地などの明るい環境に多い。細枝に産まれた卵で越冬する。

■**分布** 県内：県中～西部の山地の高原の落葉樹林（大山山系など）あるいは渓谷林（三朝町など）。記録地は鳥取市，三朝町，伯耆町（旧溝口町），日野町。県外：北海道，本州，四国，九州（日本固有種）。

■**保護上の留意点**：多様な環境を含む落葉広葉樹林を大面積で保全すること。

■**文献**：123.

執筆者：永幡嘉之

キマダラルリツバメ 鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科
Spindasis takanonis (Matsumura, 1906)

鳥取県：準絶滅危惧 (NT)

環境省：準絶滅危惧 (NT)



鳥取市東町 2006.7.4 / 撮影：佐藤隆士

■**選定理由**：生息地がきわめて局地的である。絶滅した産地もある。

■**特徴**：前翅長は12-18 mm。裏面に黄色の地色に銀白色条を伴う複数の黒線が縦に走り，後翅には2本の尾状突起がある。年1化（6月中旬-7月中旬）。孵化した幼虫はハシブトシリアゲアリの巣に入り，全期間アリから餌をもらって成長する。

■**分布** 県内：海岸部のクロマツ・ニセアカシア，低地のサクラ・アカマツ，山地のカシワ林に局所的に生息する。近年，米子市内，南部町（旧西伯町），大山町（旧名和町）の人工的な公園から発見が相次いだ。県外：本州各地。国外：中国，朝鮮半島。分布全体を俯瞰すると孤立的で地理変異も顕著であり遺存種のように思われるが，実際の生息地は人為的環境に進出しているのが興味深い。

■**保護上の留意点**：松くい虫防除の農薬空中散布の影響が大きい。幼虫や蛹を採集するためにアリの巣を壊す，という採集圧もある。

■**特記事項**：鳥取市（東町，栗谷町，上町）の「キマダラルリツバメ生息地」は国の天然記念物（地域指定：1934年制定）。

■**文献**：198, 211, 217.

執筆者：淀江賢一郎

クロシジミ 鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科
Niphanda fusca (Bremer & Grey, 1852)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧I類 (CR+EN)



鳥根県隠岐知夫里島 1994 / 撮影：鳥越康教

■**選定理由**：遷移途中相にのみ生息，環境が失われ近年の確認例が乏しい。
■**特徴**：中型のシジミチョウで7月に発生。幼虫は初期にはアブラムシなどの分泌液を食し，以後はクロオオアリの巣の中でアリと共棲する。クロオオアリが高密度で生息する草原，疎林や伐採跡地，時に渓谷沿いの樹林に生息。草刈りや放牧により維持されてきた草原周辺の疎林が消失したこと，本来の自然環境である天然の風衝草原が植林で消失したことが，減少の大きな要因であると考えられる。

■**分布** 県内：鳥取市国府町から日野町まで。かつては草原の周囲の疎林に決して珍しい種類ではなかったが，大部分ではすでに絶滅したとみられる。県外：本州，四国，九州，隠岐，対馬；中国大陸，朝鮮半島。

■**保護上の留意点**：生息が確認された際には，草刈りなどにより，生息環境を人為的に維持する必要がある。

■**文献**：124.

執筆：永幡嘉之

シルビアシジミ 鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ
Zizina otis emelina (de l'Orza, 1869)

鳥取県：絶滅危惧I類 (CR+EN)

環境省：絶滅危惧I類 (CR+EN)



米子市福市 2009.7.24 / 撮影：坂田国嗣

■**選定理由**：生息地の孤立と分断による地域個体群の消滅が著しい。

■**特徴**：普通種のヤマトシジミに酷似する。年数回発生し，4月中旬から10月まで見られる。幼虫越冬。食草ミヤコグサの生育する河川敷や堤防，海岸などに生息。基本的に在来の草原に生息するが，県西部では，道路工事できた造成地に，食草ミヤコグサとともに一時的に進出した例がある。

■**分布** 県内：県中部，西部の平地。東部では1980年以降の記録がない。県外：本州，四国，九州；インド，オーストラリア区，アフリカ。

■**保護上の留意点**：堤防などの自然草地の草刈りによる維持が重要。その際，連続性を持たせるように留意する。外来植物の種子の吹き付けは植生に甚大な影響を与えるので，未然に防ぐ。

■**文献**：125.

執筆：永幡嘉之

ゴマシジミ 鱗翅目 (チョウ目) シジミチョウ科
Maculinea teleius (Bergsträsser, 1779)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：絶滅危惧II類 (VU)



大山鏡ヶ成 / 撮影：鳥越康教

■**選定理由**：県内の生息地が著しく減少し，個体数が激減している。

■**特徴**：年1化，幼虫越冬で，成虫は盛夏に出現。山地のススキ草原に生息し，草原を緩やかに飛び，花を訪れる。ワレモコウ (バラ科) に産卵し，1, 2齢幼虫はワレモコウを食し，以後はクシケアリの巣の中に入り，同種の幼虫を捕食する。

■**分布** 県内：三朝町以西の中国山地の草原。大山山系に安定した生息地があったが，現在県内に残る生息地は数カ所しかなく，現状把握が急務。県外：北海道，本州，九州；ユーラシア大陸北部。

■**保護上の留意点**：いずれの生息地も遷移が進行しているので，維持のためには人為的な刈り取りが必要。ワレモコウの花穂が失われると産卵場所を失い，卵や幼虫も死滅するため，刈り取りの時期と方法は要検討。本種に限っては火入れも有効だが，他の草原性種への負の影響が大きい。

■**文献**：126.

執筆：永幡嘉之